

横須賀市自然・人文博物館

博物館
わくわく
たけん
ブック

本編



横須賀が好き!



YOKOSUKA CITY SINCE 1907

令和元年(2019年)7月



「博物館わくわくたんけんブック」について

◆「博物館わくわくたんけんブック」を作成するにあたって

「博物館わくわくたんけんブック」は、横須賀市自然・人文博物館を見学する際、一つの展示について、より深く知っていただくために作成しました。

一般の方や、保護者の方におかれましては、「博物館わくわくたんけんブック」があることによって、学芸員と一緒になくても、より深い知識を得ることができ、お子さんに説明をしながら見学することができます。

また、学校の先生方におかれましては、社会科や理科、総合的な学習の時間の授業でぜひ活用していただきたいと思います。校外行事として来館される場合は、当日だけではなく、事前学習や事後学習でも活用していただけると幸いです。

「博物館わくわくたんけんブック」が、さまざまな形でご利用いただけることを願っています。

◆「博物館わくわくたんけんブック」の使い方（見方）

この「博物館わくわくたんけんブック」は博物館の展示資料の解説などを掲載した「本編」と博物館を楽しく効率的に見学していただくための順路図を収めた「マップ編」で構成されています。

博物館は自然博物館棟と人文博物館棟に分かれていて2階の渡り廊下でつながっています。はじめて見学される方は、まず、はじめに「マップ編」の自然・人文博物館展示室案内図をご覧ください建物の構造を理解してください。博物館のシンボルのナウマンゾウがいる文化会館に面した出入口は自然博物館の2階になります。

「本編」では博物館に展示している資料について見学の順路に沿って解説をしています。「本編」の「目次」と「解説文」とマップ編の「順路図」にある丸数字が対応していますので、博物館全体を見学される場合はスタートの自然館2階のナウマンゾウの展示から「解説文」を見ながら「順路図」に沿って見学をしてください。特定の展示だけを見学したい方は「目次」からお目当ての展示を確認して「順路図」で展示場所を確認してご覧ください。

博物館には様々な分野の学芸員がいます。ご質問、ご相談などがある場合には自然館2階の事務室に声をお掛けください。（学芸員は「本編」の43ページにて紹介しています。）

博物館にはお客様用のエレベーターはありませんが業務用のエレベーターがあります。ベビーカーや車椅子でのご利用などが必要な場合には事務室またはお近くの警備員に声をお掛けください。

展示物の撮影は業務目的などで利用される場合を除き全て自由です。

目 次

1. はじめに	1
• 博物館の沿革 • 自然教育園 • ヴェルニー記念館	
• 博物館の使命 • 博物館の事業 • 収集資料	2
2. 自然博物館	3
2-1 自然館 2階受付	
• 受付	
2-2 自然館 2階展示室	
①ナウマンゾウ	
◆コラム①「横須賀市のナウマンゾウ」	4
②ミツクリザメ	
③さわれる展示	5
④三浦半島をとりまく地形（地模型）	
⑤三浦半島の活断層	
⑥津久井化石床のはぎ取り標本	6
⑦深海から生まれた三浦半島	7
⑧岩石をさわってみよう	8
⑨三浦枕状溶岩	
⑩三浦半島の一世紀	
⑪ミニシアター「干潟の生き物」	
⑫森（森林）のジオラマ	
⑬海（海岸）のジオラマ	9
◆コラム②「ハマオモトヨトウ」	10
⑭オオスズメバチの頭部大型模型	
◆コラム③「三浦半島のスズメバチ」	11

2-3 自然館 中3階展示室	12
⑮サケガシラ	
⑯珍しい標本コーナー	
⑰深海の珍しい生き物	13
⑱岩石壁面	
2-4 自然館 1階展示室	
⑲トピックス展示コーナー	
⑳生命の歴史	14
㉑美しい石	
㉒三浦半島の植物	
㉓貝類コレクション	15
㉔海の貝	
㉕磯の生き物	16
㉖干潟・砂浜の生き物	
㉗三浦半島の哺乳類	
㉘三浦半島の魚類	17
㉙三浦半島の鳥類	
㉚危険な生物	18
㉛三浦半島の両生・は虫類	
㉜三浦半島の昆虫1	
㉝三浦半島の昆虫2	
㉞ホタル	19
㉟ニュージーランドの発光昆虫	20
㊱陸の発光生物・光る石	
㊲海の発光生物	
㊳深海のジオラマ	
㊴発光魚	21

3. 人文博物館 22

3-1 人文館 ロビー

- ①三浦半島をつくる地層
- ②映像資料閲覧コーナー
- ③丸木舟
- ◆コラム④「丸木舟とともに出土した全国各地の土器」 23

3-2 人文館 1階展示室

- ④三浦半島にヒトが住みついたころ
- ⑤先土器時代の三浦半島 24
- ⑥さわってみよう：縄文時代の土器
- ⑦採集の時代 ー縄文時代のころー
- ⑧採集の生活 ー採集生活の限界ー
- ⑨海の生活（ジオラマ） 25
- ⑩農耕のはじまり ー弥生時代のころー
- ⑪豪族の誕生 ー古墳時代のころー
- ⑫弾琴男子椅座像埴輪 26
- ◆コラム⑤「朝鮮半島から伝えられた？古墳時代の琴」
- ⑬さわってみよう：古墳時代の土器
- ⑭都と三浦半島 ー奈良～平安時代のころー 27
- ◆コラム⑥「日本にふたつしかない宗元寺の瓦」
- ⑮三浦一族と三浦半島 ー鎌倉～室町・戦国時代のころー 28
- ⑯衣笠城址のジオラマ
- ⑰さわってみよう：古代・中世の瓦
- ⑱横須賀ゆかりの人物
- ⑲1階ラウンジ 29

3-3 人文館 2階展示室

- ⑳ようこそ近世・近代の世界へ ー海を切り拓いた人たちー
- ㉑「人文館」の記念スタンプ 30
- ㉒横須賀製鉄所の記念スタンプと煉瓦の型枠
- ㉓17～19世紀の和洋船と浦賀
- ㉔浦賀の絵図
- ㉕さわれる展示：フランス瓦
- ㉖村の暮らしと三浦半島 ー江戸時代 中頃からー 31
- ㉗地引網コーナー
- ㉘ㄨ粕（しめかす）小屋コーナー

②⑨古民家コーナー	32
③⑩マイワイ コーナー	
③⑪タコ漁コーナー	
③⑫農具コーナー	33
◆コラム⑦「西か？東か？三浦半島」	
③⑬さわれる展示：和瓦（わがわら）－近世・近代－	34
③⑭横須賀製鉄所ジオラマ	
③⑮横須賀で建造された艦船（駆逐艦など）	
③⑯船と造船所図解（パネル）	
③⑰横須賀製鉄所のあゆみと日本近代化への貢献	
③⑱ペリー来航から始まった近代外交	35
③⑲近代初の外交使節と造船所計画	36
◆コラム⑧「横須賀の日本遺産－『ヨコスカ製鉄所』の赤レンガ」	37
④①トピックス展示コーナー	38
④②近現代のあゆみ－幕末からの近代化と都市化－	
④③大画面映像展示	39
④④映像資料閲覧コーナー	
④⑤旧船台地下より出土した松丸太と石材	
◆コラム⑨	
「上町の看板建築と汐入・坂本界限の出桁造り等の商店建築群」	40
	41
3－4 人文館 3階	42
・3階ラウンジ	
・3階ラウンジ横 昔のおもちゃコーナー	
・文化財収蔵庫	
・トピックス展示コーナー	
・日本遺産	
4. 学芸員紹介	43
5. 自然教育園・ヴェルニー記念館	44
・馬堀自然教育園	
・天神島臨海自然教育園	
・ヴェルニー記念館	45

1. はじめに

◆博物館の沿革

横須賀市自然・人文博物館は 1954 年（昭和 29 年）に、ペリー上陸の地、久里浜に「横須賀市博物館」として開館しました。1970 年（昭和 45 年）に自然部門が、1983 年（昭和 58 年）に人文部門が深田台の中央公園内に移転して現在に至っています。1976 年（昭和 51 年）には国の重要有形民俗文化財に指定された三浦半島漁撈用具を収蔵する文化財収蔵庫が併設されました。このほか、森林と水辺の保全を目的に、1959 年



（昭和 34 年）に馬堀自然教育園（1985 年に学習棟を開設）が開園し、1966 年（昭和 41 年）には海岸・海洋の保全を目的に、天神島臨海自然教育園（1999 年にビジターセンターを開設）が開園しました。横須賀製鉄所で使われた日本最古のスチームハンマーが国の重要文化財に指定されたのを機に、2002 年（平成 14 年）には J R 横須賀駅に隣接してヴェルニー記念館が開設されました。このように横須賀市自然・人文博物館は本館と 3 つの付属施設からなる博物館です。

◆自然教育園

博物館では、三浦半島の代表的な海と山の自然環境を残した地域を自然教育園として管理し、自然観察や環境教育を行っています。1959 年に国から譲渡された馬堀自然教育園は 3.8ha の園内で、ホタルやトウキョウサンショウウオ、メダカなどの水生生物と森林の植物の保護・育成を行っています。天神島に生育するハマオモト（ハマユウ）は北限のハマオモトとして 1953 年に神奈川県指定を受け、1965 年には天神島・笠島及び周辺水域 54ha が神奈川県の天然記念物に指定されました。1966 年には天神島臨海自然教育園となり、以来景観を保全し、海岸や海中の動植物を保護しています。

◆ヴェルニー記念館

横須賀製鉄所（のちに造船所）を建設し、日本近代工業化をつくりあげたフランス人技師、フランソワ・レオンス・ヴェルニーの功績と、横須賀製鉄所の意義を後世に伝えるために建てられ、国指定重要文化財である現存する日本最古のスチームハンマー 2 基を保存展示しています。

1. はじめに

◆博物館の使命

おもに三浦半島の自然誌と歴史を研究し、資料を集め、展示と教育を行っています。市民文化の創造・発展に寄与する博物館として、次のような目的のもとに運営しています。

- 三浦半島の自然と人の歴史をわかりやすく展示する。
- 資料を収集して分類・整理し、学術資料として活用するとともに永久に保管する。
- 研究機関としての役割を担う。
- 生涯学習の場と機会を提供する。
- 学校教育に役立てる。
- 自然と文化の遺産を保護する立場に立つ。

◆博物館の事業

博物館資料の展示・収集・整理保存・研究を行い、博物館教室・自然観察会・野外学習・研究発表会などさまざまな教育普及活動を行っています。研究・資料収集の成果、事業報告などは以下の出版物に逐次公表されています（2019年4月現在）。

- 研究報告（自然科学）第1-66号
- 研究報告（人文科学）第1-63号
- 館報 第1-65号
- 資料集 第1-43号
- 考古資料図録 I-XVII
- 展示解説書 第1-15号
- 教育資料シリーズ 第1-48号
- 博物館だより（年3回発行）

これらの出版物は博物館本館の受付で販売または配布しています。

◆収集資料

自然科学資料：三浦半島をはじめ全国各地で収集された化石・岩石・鉱物・海藻・シダ植物・種子植物・菌類・魚類・貝類・昆虫類・発光生物のほか、多数の寄贈資料があります。2019年4月までに動物約95,300件、植物約76,200件、地球科学約5,600件などが登録されています。

人文科学資料：三浦半島有形文化財、国・県指定重要有形文化財（三浦半島の漁撈用具コレクション）、三浦半島出土考古資料、ペリー関係などの歴史資料、横須賀製鉄所設計図面など計約1,200件が登録されています。

2. 自然博物館

2-1 自然館 2階受付

◆受付

- ・研究報告、資料集、特別展示解説書（図録）などの刊行物を販売しています。
- ・缶バッジ、ピンバッジ、絵葉書、トートバッグなどの記念品を販売しています。
- ・周辺には三浦半島で見られる鳥や昆虫など、生き物のシルエットが貼ってあります。
- ・貼ってある生き物の種類は21種類です。
- ・サクラとクヌギの葉は本物を使用しています。
- ・「ペリーの顔」と「自然博物館のロゴマーク」の記念スタンプを設置しています。

2-2 自然館 2階展示室

ナウマンゾウの模型や化石、三浦半島周辺の地形を再現した1/50,000の地形模型、北武断層をはじめとした「三浦半島の活断層」地図、化石や岩石で知る「深海から生まれた三浦半島」、1/6,600の三浦半島の衛星写真を中心に、過去100年の地形・景観の変化を展示した「三浦半島の一世紀」、ミニシアター「干潟の生き物」、照葉樹林を再現したジオラマ「三浦半島の自然・森林」、天神島をモデルにしたジオラマ「三浦半島の自然・海岸」によって三浦半島の自然が概観できます。中2階の珍しい標本コーナーではリュウグウノツカイなどの大型標本を展示しています。

①ナウマンゾウ（柴田学芸員）

- ・横須賀市内では米海軍横須賀基地と長井から見つかっています。
- ・米海軍横須賀基地産の化石は、横須賀製鉄所建設中の1867年に見つかった下あご化石で、レプリカを展示中です。
- ・長井産の化石は1929年・1964年・1970年に発見されました。歯、左肩甲骨、左上腕骨の実物を展示中です。
- ・全身骨格模型は千葉県印旛沼産の化石を参考に復元されました。肩高は約2mで、若いオスの個体と考えられています。

コラム①

「横須賀市のナウマンゾウ」

ナウマンゾウは35万～2万年前に日本に生息していたゾウのなかまで、肩の高さは1.9～2.7 m、アジアゾウやアフリカゾウよりもやや小型でした。日本全国から化石が見つっています。横須賀市では米海軍横須賀基地内と、長井から見つかり、このうち米海軍横須賀基地の化石は世界で初めて見つかったナウマンゾウ化石です。



ナウマンゾウ

現在の米海軍横須賀基地である横須賀製鉄所の敷地内で、1867年にナウマンゾウの下あご化石が見つかりました。この化石はナウマンゾウの名前の由来となったドイツ人の地質学者ナウマン（1854～1927）によって研究された歴史的な標本です。ナウマンは1881年に横須賀産と東京江戸橋産の化石を論文で報告していますが、これらが科学的に報告された世界で初めてのナウマンゾウ化石です。下あご化石のうち、左側は国立科学博物館に収蔵されています。右側は長らく行方不明になっていましたが、学習院中等科・高等科に収蔵されていることが1999年に明らかになりました。横須賀市長井では、ナウマンゾウの臼歯が1929年に見つかりました。1964年にも1929年の発見場所からやや離れたところで臼歯や上腕骨の一部などが見つかり、1970年に発掘が行われました。その結果、左肩甲骨や左上腕骨がほぼ完全な状態で見つかりました。

②ミツクリザメ（萩原学芸員）

- ミツクリザメの「ミツクリ」とは「箕作佳吉（みつくり かきち）」という人の名前に由来します。
- 「箕作佳吉」は帝国大学三崎臨海実験所（現・油壺臨海実験所）の初代所長です。
- 学名 *Mitsukurina owstoni* (ミツクリ オーストリア) は最初の標本をアメリカの研究者でミツクリザメの命名者ジョルダンに標本を譲渡した箕作と、標本の収集者で当時横浜在住の英国人貿易商であったアラン・オーストンの2人に献名したものです。



ミツクリザメ

③さわれる展示（自然系学芸員）

- 海岸の漂着物：海岸に打ちあがる生物の遺骸（体の一部）の正体は？
答えはラベルを参照してください。
- 岩石を見分けよう：ヒントと答えを参考にさまざまな岩石の名称を学習できます。
- 虫の《はね》をよく見よう：チョウのはね等をパウチして展示しています。

④三浦半島をとりまく地形（地模型）（柴田学芸員）

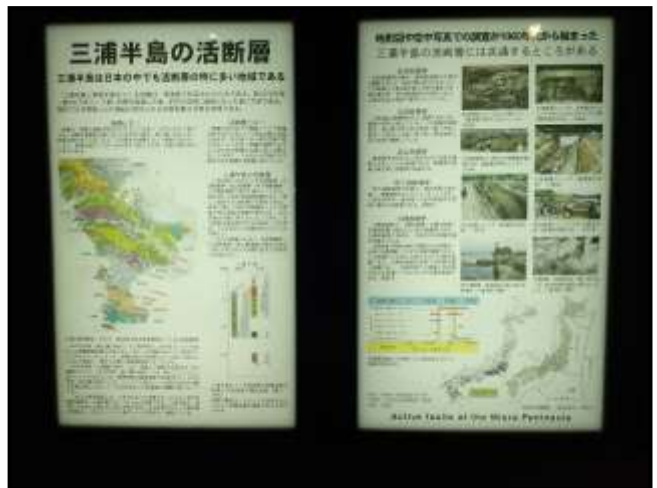
- 三浦半島周辺の地形を、水平 5 万分の 1、垂直 5 万分の 3 の縮尺で、海底を含めて立体的に復元しています。
- 房総半島、伊豆半島、富士山、甲府盆地なども含みます。
- フィリピン海プレートと北米プレートの境界が赤線で示されています。プレート境界は相模湾や駿河湾を通り、これらの湾は水深が深くなっています。フィリピン海プレートは年間約 4cm の速さで北米プレートの下に沈みこんでいます。
- 大正 12 年（1923 年）の大正関東地震（関東大震災）も相模湾のプレート境界を震源域として発生しました。



三浦半島をとりまく地形

⑤三浦半島の活断層（柴田学芸員）

- 活断層とは、過去数十万年間に繰り返し活動して地震を起こし、今後も活動して地震を起こす可能性がある断層のことです。
- 三浦半島には西北西－東南東に走る 5 本の活断層があります。北から衣笠断層・北武断層・武山断層・南下浦断層・引橋断層と呼ばれています。
- 北武断層と武山断層は近い将来、活動して地震を起こす可能性があると言われていいます。
- 活断層の調査は地面に溝（トレンチ）を掘り、何年前に動いて地震を起こしたか、を明らかにします。また、活動間隔と最新の活動時期から、今後の活動を予測します。
- 三浦半島では 1995 年～2000 年ごろに多くの調査が行われました。



三浦半島の活断層

⑥津久井化石床のはぎ取り標本（柴田学芸員）

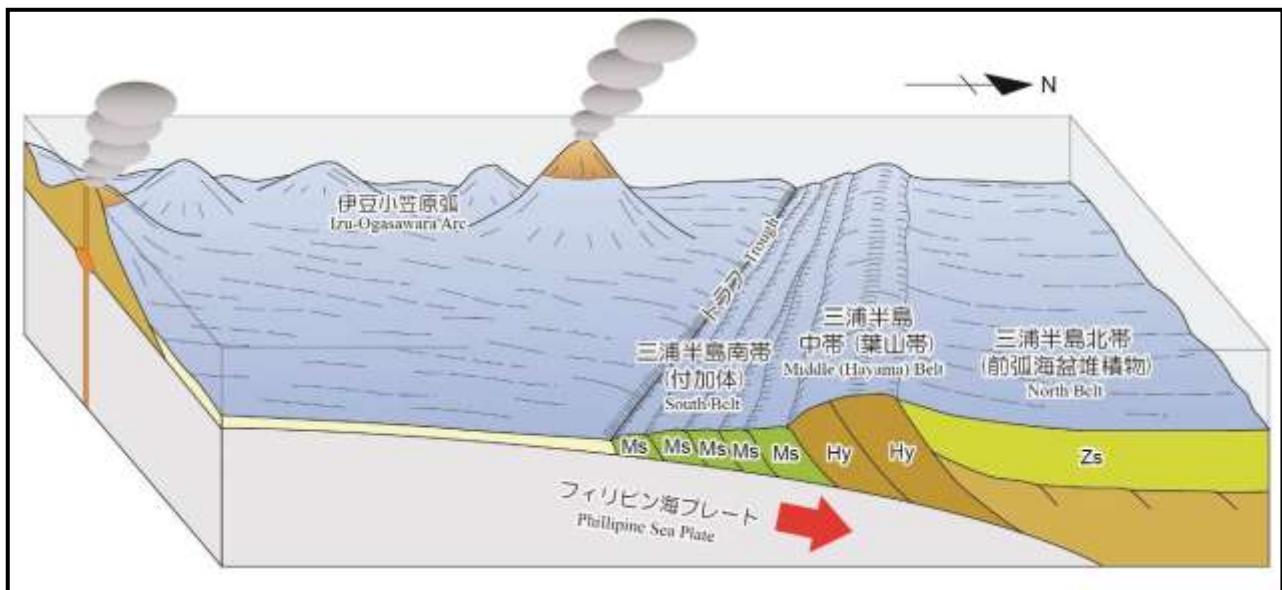
- 津久井浜駅の北に、貝化石がたくさん採集できる崖がありましたが、2007年と2008年の急傾斜地対策工事によって人工的におおわれました。
- 工事中に専用の接着剤を用いて地層を固め、はぎ取った標本を展示しています。
- 27種の貝化石のほか、フジツボやウニの化石を含んでいます。ほとんどが現生種ですが、トウキョウホタテのような絶滅種も見られます。
- 約30万年前に浅い海でできた地層（宮田層）のはぎ取り標本です。



津久井化石床のはぎ取り標本

⑦深海から生まれた三浦半島（柴田学芸員）

- 三浦半島の地層や岩石の大部分は深い海の底でつくられ、地球の表面をおおう岩板であるプレートのはたらきによって変形を受け、隆起したものです。これらの地層や岩石は5,000万年前以降の新生代につくられました。
- 三浦半島の地質は、分布や生い立ちから南帯、中帯（葉山帯）、北帯に分けられます。
- 南帯には三浦層群三崎層や初声層が分布しています。三崎層はプレートの沈み込みによってつくられた地層である付加体と考えられています。
- 中帯（葉山帯）は、三浦半島では古い時代の地層である葉山層群と、玄武岩や蛇紋岩などの火成岩類の集合体からなります。
- 北帯には三浦層群逗子層や池子層、上総層群が分布します。関東平野の基礎となる地層です。



約 500 万年前の三浦半島

- 葉山層群から見つかる子産石（こうみいし）とへそ石は、いずれも炭酸塩コンクリーションです。地層の一部が方解石（ほうかいせき）や苦灰石（くかいせき）などでセメントされ、固まったものです。へそ石は生物の巣穴の化石と考えられています。
- 池子層から多く見つかるシロウリガイ類の化石は三浦半島特産の化石といえます。現在の相模湾の水深約 1,000 m にも生息しています。海底から湧き出すメタンを栄養源としています。
- ナウマンゾウの化石は、三浦半島が陸地となった約 50 万年前以降の地層（宮田層、横須賀層）から見つかっています。
- ヤベオオツノジカはナウマンゾウと同時代に生息していた巨大な角を持つシカのなかまです。横須賀市からは角やかかと（距骨）の化石が見つかっています。



化学合成生物群集の化石



深海から生まれた三浦半島

⑧岩石をさわってみよう（柴田学芸員）

- 三浦半島のいろいろな岩石がさわれます。
- 凝灰岩（ぎょうかいがん）、スコリア質凝灰岩、凝灰質斜交葉理砂岩（しゃこうようりさがん）は、いずれも火山の噴出物が降り積もってできた岩石です。

⑨三浦枕状（まくらじょう）溶岩（柴田学芸員）

- 5,000 万年前につくられた、三浦半島で最も古い岩石です。
- 日本から離れた海底に噴出したマグマが固まったもので、プレートのはたらきで三浦半島まで移動してきました。
- 丸い形が枕のように見えることが名称の由来です。
- 黒色の火山岩である玄武岩（げんぶがん）の 1 種です。
- 横須賀市指定天然記念物で、横須賀市平作の万葉公園で見られます。

⑩三浦半島の一世紀（柴田学芸員）

- 2009 年の衛星写真（床面）・1990 年・1985 年・1980 年・1965 年・1954 年・1947 年の空中写真・1882-1883 年の地図を展示しています。
- 地形や土地利用の変遷、緑地の減少、海岸線の変化などを読み取ることができます。



三浦半島の一世紀

⑪ミニシアター「干潟の生き物」（萩原学芸員）

- 三浦半島（三浦市江奈湾）をはじめ、九州、琉球列島などの干潟の特徴的な生き物を紹介しています。
- 上映時間は約 10 分です。

⑫森（森林）のジオラマ（萩原学芸員）

- 三浦半島の古代の森を再現したものです。
- スタジイの大木は博物館を建てる際に造り込んだもので、建物の入口より大きいです。
- 現在は生息していないニホンジカ・ムササビ・ニホンイノシシ・ホンドギツネなども展示されています。
- それらの骨や角、歯などは縄文時代の貝塚から多数見つかっています。
- 2017 年からはゲンジボタルを模した LED を 64 灯設置し、三浦半島のホタルの時期（5 月中旬～6 月末頃）に合わせて点灯させています。

⑬海（海岸）のジオラマ（萩原学芸員）

- 三浦半島の相模湾岸 天神島の海をモデルに作られたジオラマです。
- 岩はFRP（ガラス繊維樹脂）、海面はアクリル樹脂製です。
- 動物は実物の標本です（はく製や貝殻標本など）。
- 植物はレプリカと実物標本です。
- ハマオモトは市政 70 周年記念時に横須賀市の花に制定されました。
- 横須賀市佐島の天神島が北限の自生地であることが制定の由来です。
- 天神島臨海自然教育園では北限のハマオモトの自生地を保護しています。
- 花は白色で強い芳香があることが特徴で、種子は海流散布です。
- 展示のレプリカは、本物から型をとって作成されたものです。
- ハマオモトの模型の3か所（2つは葉の上、1つは茎）に、ハマオモトヨトウ（ガの一種）の幼虫の模型を展示しています。
- ハマオモトヨトウは幼虫が主にハマオモトを食べることが知られ、かつてはハマオモトと同様に、天神島が本種の分布の北限であったと考えられます。



海のジオラマ

コラム②

「ハマオモトヨトウ」

海（海岸）のジオラマにも展示されているハマオモトヨトウは、幼虫がハマオモト以外のヒガンバナ科植物も食べることが知られ、近年は園芸品種を足がかりにハマオモトよりも分布を拡げているようです。かつては天神島が自然分布の北限であった可能性から、ハマオモトのように横須賀市の「虫」として注目されるべき存在でもあったのですが、幼虫が白黒のまだら模様で成虫が地味な色のガ（蛾）であるせいでしょうか、知る人ぞ知る存在になっています。一方、本種の幼虫が昼でも植物上で活動しているのは、若いうちは葉や茎、つぼみや若い実に潜って柔らかい組織を食べることや、有毒で知られるヒガンバナ類の成分を体内に取り込むことなどによって、鳥やハチ類などの天敵から身を守っているためと考えられます。



ハマオモトヨトウ幼虫



ハマオモトヨトウ成虫

⑭オオスズメバチの頭部大型模型（内船学芸員）

- ・オオスズメバチの女王の頭部をモデルにつくられた大型模型です。
- ・頭部大型模型のほか、翅（はね）の大きく拡大したシートも展示することで、記念撮影スポットとしています。
- ・頭部模型は実物の約 100 倍、翅のシートは大・小それぞれ実物の約 40 倍・20 倍です。

コラム③
「三浦半島のスズメバチ」

三浦半島にはスズメバチのなかまが7種知られています。うち6種（オオスズメバチ、キイロスズメバチ、コガタスズメバチ、ヒメスズメバチ、モンスズメバチ、クロスズメバチ）は以前から知られていたもので、残り1種（チャイロスズメバチ）は2010年代に三浦半島にやってきたと考えられます。博物館では2010年から2018年まで9年間にわたり、横須賀市保健所と一緒に横須賀市内のスズメバチ類をトラップによって調査しました。その成果を展示にも取り入れた2018年度特別展示「探検！スズメバチと身近な昆虫の世界」では、「もしも私たちがスズメバチの巣の中に入ったら...」を表現するため、オオスズメバチの頭部大型模型を制作しました。現在、この模型は自然館2階にて常設されています。



オオスズメバチ頭部模型&翅シート



2-3 自然館 中3階展示室

⑩サケガシラ（萩原学芸員）

- ・リュウグウノツカイ科に近縁なフリソデウオ科の魚です。
- ・展示の個体は全長 278cm です。
- ・1968 年に三浦市毘沙門沖の浦賀水道で、エビ漁を行う三枚網（刺し網の一種）で漁獲されたものです。



サケガシラ

⑩珍しい標本コーナー（萩原学芸員）

- ・相模湾で行われていた深海カニかご漁では珍しい大型のカニ類やタラバガニ類が漁獲されていました。
- ・オオエンコウガニ以外はすべてタラバガニ科です。
- ・タラバガニ類はカニではなくヤドカリに近いなかまで、現在は乱獲によって漁獲量は減ってしまい相模湾ではあまり漁が行われていません。
- ・リュウグウノツカイは最大全長 10m に達する魚で、沖合の中層で生活しています。
- ・ヤマカガシは毒ヘビで、展示標本（全長 130cm）は国内でも最大級の個体です。
- ・ソデイカは南方の大型のイカで、近年は横須賀のスーパーマーケットでも刺身が売られています。
- ・ニュウドウイカは北太平洋に分布する大型のイカですが、肉にアンモニアを含むため味が悪く食用にはされていません。
- ・ラブカは頭部の形、歯の形や並び、鰓の数、尾の形など古生代のサメと共通する特徴をもつことから「生きた化石」とよばれるサメです。



珍しい標本コーナー（深海のカニ類）

⑰深海の珍しい生き物（萩原学芸員）

- ・横須賀市夏島町に拠点を置く「国立研究開発法人 海洋研究開発機構（JAMSTEC）」に、画像・映像提供の協力をいただいた展示です。
- ・相模湾の深海で見られる深海の生き物を、JAMSTEC撮影の画像・映像と博物館所蔵の標本とのコラボレーションで紹介しています。
- ・特にセンジュエビの採集や、深海ザメ「ラブカ」の深海での生態などの映像は、たいへん貴重な資料です。

⑱岩石壁面（柴田学芸員）

- ・18種類の国産、外国産の石材を展示しています。
- ・岩石には、土砂や火山灰などが降り積もってきた堆積岩、マグマが固まった火成岩、それらが熱や圧力で変質した変成岩があります。
- ・大谷石、仙台石、多胡石、伊豆青石、桑尾、土佐錦、トラバーチン、雲竜、宮古は堆積岩です。
- ・インペリアルレッド、万成石、稲田石、滝野石、浮金石、エメラルド、蛇灰岩は火成岩です。
- ・あられ（大理石）は変成岩です。大理石は石灰岩がマグマの熱で変成したものです。

2-4 自然館 1階展示室

三浦半島の「植物」、「昆虫」、「海辺の生物」、「魚類」、「鳥類」、「哺乳類」などを標本や生態写真などで詳しく紹介しています。また、化石によって「生命の歴史」を概観することができます。ホタルやホタルイカなどの「発光生物」に関する展示は、本館の展示の特色です。

⑲トピックス展示コーナー（自然系学芸員）

- ・2～3か月ごとに展示を更新しているコーナーで、季節や時事に合わせた内容を紹介しています。

㊤生命の歴史（柴田学芸員）

- 教科書に掲載されているような代表的な化石を地質時代ごとに展示しています。
- 各地質時代の代表的な化石は次のとおりです。（カッコ内は当館展示の標本名）
 - 古生代：三葉虫（バシリクス）・フズリナ（ヤベイナ）・ウミユリ（クリノイド）
 - 中生代：恐竜（展示なし）・魚竜（ウタツサウルス）・首長竜（エラスモサウルス科）・アンモナイト（ホランドイテス・アマルテウス・リトセラス・ユーパキイディスキス）。
 - 新生代：哺乳類（デスモチルス・パレオパラドキシア・マンモスゾウ・イノシシ類・ナガスクジラ類など）
・貨幣石（ヌムリテス）・貝類（ビカリヤ・トウキョウホタテ）。



魚竜（ウタツサウルス）

㊤美しい石（柴田学芸員）

- 大型の鉱物資料を展示しています。
- 三浦半島や神奈川県では大型の鉱物は見つかりません。
- サイコロ状の黄鉄鉱（おうてっこう）も人工物ではなく、自然の結晶の形です。



黄鉄鉱（おうてっこう）

㊤三浦半島の植物（等々力学芸員）

- 天神島臨海自然教育園の様々な環境に生育する植物を紹介しています。
 - 砂 浜：ハマダイコン・ハマエンドウ・ハマヒルガオ
 - 磯 ：スカシユリ・ハマカンゾウ
 - 塩沼地：ハママツナ・ホソバノハマアカザ
- ハマオモト（ハマユウ）
 - 横須賀市の花です。
 - 天神島臨海自然教育園が北限となっています。
 - 1953 年（昭和 28 年）に神奈川県天然記念物に指定されました。

- ・馬堀自然教育園の植物
 - ・シイ類やタブノキといった照葉樹林の保全、林床（りんしょう）にはアスカイノデ等のシダ植物が繁茂、水路や池の周辺には水辺の植物が豊富です。
- ・キノコ
 - ・三浦半島では約 300 種のキノコが確認されています。
- ・三浦半島を代表する暖地性の植物
 - ・フウトウカズラ・ハマボウ・ワダンなどが代表的です。
- ・四季の花
 - ・それぞれの季節に見られる植物を紹介しています（季節ごとに入れ換えて展示しています）。

㊸貝類コレクション（萩原学芸員）

- ・博物館に収蔵されている著名な貝類コレクターからの寄贈標本を紹介しています。
 - ・細谷コレクション
細谷 角次郎（ほそや かくじろう）氏
（1884-1956）による貝類全般コレクション 3,640 件。
 - ・平瀬コレクション
平瀬 与一郎（ひらせ よいちろう）氏
（1859-1925）による陸貝類コレクション 631 件。
 - ・中上川コレクション
中上川 小六郎（なかかみかわ ころくろう）氏（1894-1965）による貝類全般コレクション 1,033 件。



貝類コレクション

㊹海の貝（萩原学芸員）

- ・オキナエビスガイ類は古生代からほとんど姿を変えずに現生に至っている「生きた化石」のひとつです。白亜紀まで栄えましたが、恐竜と同時期にほとんどが絶滅し、現生のものは生息域が深海に限定しています。
- ・タカラガイは生きているときに外套膜（がいとうまく）という器官で殻を覆っているため汚れや傷がつきにくく、美しい貝殻をもっています。
- ・タカラガイは暖かな海に生息するため、三浦半島（相模湾）を分布の北限とするものも多いです。
- ・最大水深 1,000mを超える相模湾には、他所では近海で見ることのできない貝類が多く生息しています。

㊤磯の生き物（萩原学芸員）

- 磯には岩礁や「ゴロタ場（ば）」と呼ばれる転石帯などがあり、岩の表面や隙間、石の下など環境によって様々な生物が生息しています。
- 「タイドプール」とも呼ばれる「潮だまり」は、潮汐（ちょうせき：潮の干満）によって生じた海水の水たまりで、とても多くの生物が観察できるポイントになっています。
- 海藻やフジツボ・カイメン動物などの付着動物は、潮位によってすみわけをしていて、乾燥に強いものが高い位置に、競合に強いものが低い位置に生息しています。
- ウミウシ類は後鰓（こうさい）類という、貝殻が退化した巻貝のグループに属しています。
- 相模湾のウミウシ類は、昭和天皇の研究のため皇居内に設立された「生物学御研究所」が1949年に刊行した、当時としては世界でも珍しいウミウシ類の図鑑「相模湾後鰓類図譜」により世界中に知られるようになりました。
- 天神島臨海自然教育園では博物館の調査によって100種類以上のウミウシ類が見つかっています。



磯の生き物

㊤干潟・砂浜の生き物（萩原学芸員）

- 干潟は満潮時には海、干潮時には陸地となる遠浅の海岸に生じる特殊な環境です。
- かつて東京湾は干潟生物の宝庫でありましたが、現在はその90%が失われてしまっています。
- 三浦半島には三浦市の江奈湾・小網代湾・横須賀市の小田和湾などに、首都圏では貴重となった干潟環境が残されています。
- 干潟には、そこでしかみられない貝類・カニ類・ゴカイ類などが生息し、それらを餌にする渡り鳥の飛来地となっています。

㊤三浦半島の哺乳類（萩原学芸員）

- 三浦半島には現在、シカやイノシシといった大型哺乳類は自然分布していません。
- 近年は、アライグマやタイワンリスといった外来種の哺乳類が増え、生態系の破壊といった環境問題のほか、衛生面や経済面（作物被害や駆除費用）でも問題となっています。
- 在来の哺乳類はどれも減少の一途をたどっていて、アブラコウモリを除いたコウモリ類やニホンイタチは絶滅の危機にあります。
- 縄文時代の貝塚からは現在の三浦半島には存在しないニホンザル・ムササビ・アナグマ・カワウソなどの骨も見つかっています。

㊸三浦半島の魚類（萩原学芸員）

- シーラカンスは日本周辺には生息しておらず、展示しているシーラカンスのレプリカは、よみうりランドが所蔵する標本から型を取って作ったもので、石膏でできています。
- カルカロドン（ホホジロザメ類）の歯の化石の展示標本のうちのひとつは大楠山山頂付近から見つかったもののレプリカで、オリジナルは市民が所蔵しています。
- ヨシノボリの仲間はハゼ科の魚で、三浦半島でもっともよく見られる淡水魚のひとつです。腹びれが吸盤になっていて、堰堤（えんてい：小型のダム）などをのぼることができます。
- 三浦半島の周辺の海は黒潮という暖流の影響を受けて、暖かな海の魚が豊富に見られます。
- 展示されている魚は剥製（つまり本物）です。
- シノノメサカタザメの剥製は三浦市で漁獲され、京急油壺マリンパークで飼育されていたものです。名前が「サメ」となっていますが、本当はエイのなかまで甲殻類や貝類を食べるおとなしい種です。



三浦半島の魚類

㊹三浦半島の鳥類（萩原学芸員）

- 「三浦半島の四季の鳥」は、季節によって展示標本を入れ替えているコーナーです。
- なじみ深い三浦半島の「カラス」には、市街地に多いハシブトガラスと農耕地に多いハシボソガラスの2種があり、くちばしの形で区別できます。



三浦半島の鳥類

⑩危険な生物（萩原学芸員）

- ・野外活動で遭遇する可能性のある危険な生物を紹介しています。
- ・三浦半島を中心に、国内で見られる、人に対して有毒・有害な生物を対象に、操作ボタンで生物の分類群ごとに画像を検索できるシステムになっています。
- ・市内で特に注意が必要なもの（生命にかかわる被害があるもの）として、カツオノエボシ・スズメバチ類・マムシ・ヤマカガシなどがあげられます。

⑪三浦半島の両生・は虫類（萩原学芸員）

- ・三浦半島では、在来の両生類のすべてが絶滅に瀕しています。
- ・トウキョウダルマガエルは三浦半島から絶滅した可能性が高いです。
- ・爬虫類も数が減っていますが、ニホンヤモリは安全な住宅建材が使われるようになったことで、近年では増加の傾向があります。
- ・展示しているアオウミガメの剥製は珍しい赤色変異の個体で、アカウミガメではありません。
- ・三浦半島には9種のヘビが分布しますが、毒ヘビは2種だけです（毒ヘビについては「危険な生き物」を参照してください）。



三浦半島の両生・は虫類

⑫三浦半島の昆虫1（内船学芸員）

- ・三浦半島の昆虫相（三浦半島にくらす昆虫の顔ぶれ）を約400種の標本で展示しています。
- ・約400種の標本を、主な生息環境（山～人里～海岸）や主な季節に分けて展示しています。
- ・水辺の昆虫やめずらしい昆虫についても展示しています。

⑬三浦半島の昆虫2（内船学芸員）

- ・三浦半島の昆虫から5種を取り上げ、詳しく解説します。
- ・マイマイカブリ
幼虫・成虫ともにカタツムリを食べる大型のオサムシの仲間で、豊かな山林と草地の環境の存在を裏付けます。前翅（まえばね）が左右で融合し、後翅（うしろばね）が退化しているため飛べません。

- ベーツヒラタカミキリ

盛夏にスタジイの大木などで見られたカミキリムシの仲間で、暖地性の分布を示すことから、三浦半島が温暖な気候であることを裏付けているものの、クマゼミのように分布域が拡大することはなく、むしろ今ではほとんど見られなくなりました。

- クマゼミ

南の方に分布の中心があり、三浦半島ではかつて最南端の城ヶ島にのみ生息していましたが、徐々に分布域が北上しています。

- カワトンボ

三浦半島では河川の上流など水質が比較的良好な水辺に生息しています。従来、分類が混乱していたものが近年整理され、三浦半島産のものはアサヒナカワトンボとなりました。翅の色には橙色型と無色型があり、オスは二型とも生じ、メスは無色型のみ生じます。

- モンキアゲハ

アゲハチョウの仲間ではナガサキアゲハとともに日本最大級です。翅が黒く、後ろ翅の黄色い紋は名前の由来（紋黄）になっています。しかし、この紋は生きているときは白く、死後標本になったのち、徐々に黄色く変色した結果から名づけられたと考えられます。

⑭ホタル（内船学芸員）

- 世界のホタルと日本のホタルの代表的な標本を展示しています（赤い印をつけたものは三浦半島で見られるホタルの仲間です）。
- ホタルは世界で約 2,000 種、国内で 40 種が知られています。
- ゲンジボタルの卵・幼虫・蛹（さなぎ）
 - 成虫については、液浸標本で実物を展示しています。
- 三浦半島に生息する代表的なホタルはゲンジボタルとヘイケボタルの 2 種で、他にオバボタル、ムネクリイロボタル、クロマドボタル、カタモンミナミボタルが確認されています。
- ゲンジボタル、ヘイケボタル、ヒメボタルという日本の代表的なホタル 3 種に、エフルゲンス（パプアニューギニアに生息する「ホタルの木」で有名な種）を加えた 4 種の発光パターンを体験できます。



陸の発光生物（ホタル）

③⑤ ニュージーランドの発光昆虫（内船学芸員）

- ・アラキノカンパ・ルミノーサは「ヒカリキノコバエ（光 茸 蠅）」という発光するハエの一種です。
- ・この仲間はオーストラリアとニュージーランドの洞窟のみに生息しています。
- ・光るのは幼虫だけで、成虫はハエとカの中間の特徴を合わせもった形をしています。
- ・ジオラマは生息地のニュージーランドの洞窟がモデルになっています。
- ・ジオラマ天井部手前にいる長さ2～3cm くらいの白っぽいイモムシが幼虫で、体から垂れている糸は粘液を表現しています。
- ・体の一部を青白く光らせ、その明かりに引き寄せられた虫を粘液で捕えて食べます。
- ・ジオラマの天井に奥まで輝く星のような点は全てこの幼虫の光です。
- ・「光るイモムシ」から英語で glow worm（グローワーム）とも呼ばれます。

③⑥ 陸の発光生物・光る石（萩原学芸員・柴田学芸員・内船学芸員）

- ・陸上の生物では、カタツムリ・淡水貝・ミミズ・ムカデなどの仲間に発光するものがあります。
- ・発光生物の展示は、当館初代館長の羽根田弥太（はねだ やた）博士にちなんだ当館の特徴的な展示です。
- ・羽根田博士は発光生物研究の権威です。
- ・ノーベル化学賞受賞者で 2018 年に亡くなった下村博士が羽根田博士とともに当館の研報 34 号に発光カタツムリの発光に関する化学的な性質について研究論文を書いています。
- ・発光カタツムリはシンガポールに生息する種です。
- ・ホタル石、アラレ石など、紫外線（ブラックライト）を当てると光る鉱物があります。

③⑦ 海の発光生物（萩原学芸員）

- ・海には無脊椎動物の多くのグループに生物発光するものがあります。
- ・浅海ではウミサボテン・ウミエラ・ウミホタルなどがその代表的なものです。
- ・深海ではイカ類・ナマコ類・エビ類などが有名です。

③⑧ 深海のジオラマ（萩原学芸員）

- ・タカアシガニは世界最大の節足動物で、大きなものでは足を広げたときの幅が3mを超えます。
- ・ハコエビは泥底の深海にすむイセエビのなかまで、乱獲によって非常に数が減ってしまった種です。
- ・チョウチンアンコウはレプリカです。



深海のジオラマ（タカアシガニ）

㊼発光魚（萩原学芸員）

- 魚類の発光にはバクテリアを利用して光るものと化学反応（ルシフェリン・ルシフェラーゼ反応）によるものとがあります。
- 浅海ではマツカサウオやヒカリキンメダイなどが有名です。
- 発光の目的はチョウチンアンコウのようにエサをおびきよせるもの、ハダカイワシのように同種を見分けるためのもの、ワニトカゲギス類のように下方から襲ってくる外敵の眼から見えにくくするためのものなどがあります。
- 近年の研究では深海魚のほとんどが発光することがわかってきました。

3. 人文博物館

3-1 人文館 ロビー

①三浦半島をつくる地層（柴田学芸員・稲村学芸員）

- ・京浜急行三崎口駅付近で地層を接着剤で固めて剥ぎ取ったものです。
- ・この展示で見られるのは、三浦半島の地層のうち、新しい時代（約8万年前以降）の地層のみです。
- ・おもに陸上に降り積もった火山灰の地層である関東ローム層が見られます。
- ・約6万年前の箱根火山の大噴火によってもたらされた火山灰（TP）が見られます。この噴火で発生した火砕流は、相模湾上を渡って三浦半島西岸まで到達したと言われています。
- ・約3万年前の始良（あいら）カルデラ（鹿児島県）の大噴火によってもたらされた火山灰（AT層）が見られます。
- ・AT層より古い時代である約3万2,000年前に横須賀に人が住み始めています。



三浦半島をつくる地層

②映像資料閲覧コーナー（瀬川学芸員）

- ・三浦半島の漁撈用具や横須賀・三浦半島の民俗関係の映像資料をご覧ください。

③丸木舟（稲村学芸員）

- ・久里浜の海岸近くにある伝福寺裏（でんぷくじ うら）遺跡から出土した縄文時代中期初頭頃（約5,000年前）のムクノキで作られた丸木舟です。
- ・全長約3mと国内でも最小クラスで、1～2人用と思われます。
- ・小形であることから外洋ではなく沿岸での漁に使われたと思われます。

コラム④

「丸木舟とともに出土した全国各地の土器」

ペリーが上陸した久里浜の大浜海岸の南端、約5千年前の縄文時代中期初頭頃には波打ち際であったと思われる伝福寺裏遺跡からは、丸木舟とともに東北南部・茨城県南部・中部高地・東海地方・京都府などの土器が出土しています。丸木舟は小形であることから外海への航海はできなかったと思われますが、土器が出土していることを考えると、約5千年前の久里浜には、アメリカとはいえませんが全国各地から人や物がもたらされていたようです。



久里浜伝福寺裏遺跡出土の丸木舟

3-2 人文館 1階展示室

「三浦半島にヒトが住みついたころ」から縄文・弥生・古墳時代を経て中世の三浦一族が栄えたころまでの歴史を見ることができます。おもに三浦半島内の遺跡から出土した土器や骨角器・埴輪・鉄製品などを展示しています。また、三浦半島の海辺での生活を再現したジオラマや古墳時代の住居の模型などからは昔の人々のくらしぶりを想像することができます。

④三浦半島にヒトが住みついたころ（稲村学芸員）

- ・横須賀のはじまり、先土器時代（土器が出現する前の時代のため先土器時代とされますが、その後に始まる縄文時代などの新しい石器時代と区別するために、古い、すなわち旧石器時代と呼ばれることが多くなっています）のコーナーです。
- ・三浦半島にはじめてヒトが住みついた約3万2千年前から、土器が出現する直前の約1万5～6千年前（この時期を後期旧石器時代と呼びます）までについて、地層や自然環境の変化などを含めたパネルで紹介しています。

⑤先土器時代の三浦半島（稲村学芸員）

- ・三浦半島内の先土器（旧石器）時代の遺跡分布図や、長井で出土した石器類も展示しています。
- ・三浦半島内で出土した石器素材のなかで、黒曜石（ガラス質の火山噴出物）は箱根や伊豆半島ばかりでなく、遠く長野県や栃木県などからも運ばれてきています。
- ・横須賀最古の石器は、長井（ソレイユの丘）にある打木原（うつぎばら）遺跡から発掘された約3万2千年前の長野県産黒曜石です。また、同じ遺跡からは約3万から3万1千年前の落とし穴と思われる土坑（どこう）群が列をなしてみつかっています。

⑥さわってみよう：縄文時代の土器（稲村学芸員）

- ・縄だけでなく、貝殻や竹べらなどで文様が描かれたものもあります。

⑦採集の時代 ―縄文時代のころ― （10,000 年前～5,000 年前）（稲村学芸員）

- ・豊かな海の恵みを受けた縄文時代のはじまりのコーナーです。
- ・約1万年前の縄文時代早期から、約5千年前の縄文時代前期までのコーナーです。
- ・縄文人は、海に囲まれた三浦半島では魚介類に恵まれた暮らしをしており、当時のゴミ捨て場であった貝塚からは、貝ばかりでなく石器や土器、魚を捕るための釣針などの骨角器も数多く出土しています。
- ・三浦半島に特徴的な早期の遺跡を中心に、内原（うちはら）遺跡（長井3丁目）・吉井貝塚（吉井）・鵜が島台（うがしまだい）遺跡（三浦市三崎町）などからの出土遺物を展示しています。
- ・三浦半島には縄文時代早期の遺跡が多く、このコーナーには南関東地方の早期の基準となる土器が多数展示されています。
- ・吉井貝塚からは、東海地方でつくられた土器が多数出土していることから、約7千年以上前から東海地方と交流があったことがわかります。
- ・地球の温暖化に伴い前期に海水面が上昇すると、三浦半島は生活環境が悪化したらしく、中期以降人口の減少が進行していきます。このような現象は、千葉県・埼玉県など南関東の他地域とは対照的です。

⑧採集の生活 ―採集生活の限界― （5,000 年前～2,000 年前）（稲村学芸員）

- ・狩猟・採集生活が衰退していった縄文時代中期以降のコーナーです。
- ・約5千年前の縄文時代中期から、約3千年前の縄文時代後期までのコーナーです。
- ・江戸坂貝塚（久比里2丁目）を中心に土器・石器や漁撈用具、装身具類などを展示しています。
- ・共同作業が必要となる漁網による漁法が盛んにおこなわれていたことを示す網の重りである土器片錘（どきへんすい）が多数出土しています。

- ・縄文時代最後となる晩期の遺跡はほとんどなく、この時期は三浦半島に人が住んでいなかった可能性もあります。また、弥生時代も前期の遺跡は確認されていないことなどから、縄文時代晩期から弥生時代前期（約3千年前～2千年前）までの展示はありません。

◎海の生活（ジオラマ）（稲村学芸員）

- ・よみがえる7千5百年前のくらしのコーナーです。
- ・縄文時代早期の吉井貝塚から出土した骨角器（こっかくき：シカやイノシシなどの骨や角などで作った釣針などの道具）や自然遺物などから、当時の磯の生物や狩猟・採集方法を復元したものです。
- ・衣服は着用させていません。（当時の人々が裸だったからではなく、どのような衣服であったか不明なため、あえて着せていません。）
- ・岩礁や海中の魚や貝類は本物の標本を使用しています。（タコと海藻はレプリカです。）

⑩農耕のはじまり ―弥生時代のころ― （稲村学芸員）

- ・稲作がはじまった弥生時代から古墳時代前期にかけてのコーナーです。
- ・弥生時代中期（約2千年前）になると、三浦半島でも稲作が開始されました。
- ・後期から古墳時代前期にかけて沿岸部には大規模な集落が突如出現します。
- ・農耕以外にも、海蝕洞穴（かいしょくどうけつ：波の浸食によって自然にできた洞穴）を利用した漁撈活動もおこなわれていました。
- ・鴨居上の台遺跡（鴨井2丁目）や内原（うちはら）遺跡（長井3丁目）など大規模集落から出土した土器や、海蝕洞穴などから出土した骨角製漁撈用具などを展示しています。
- ・沿岸部の大規模集落からは伊勢湾岸などの東海系土器が多量に出土していることから、弥生時代から古墳時代にかけて東海地方から多くの人々が舟に乗ってやってきた可能性が高いようです。
- ・内原遺跡などから出土している大形の台付甕（だいつきがめ）は、カツオを煮たのではないかとわれています。

⑪豪族の誕生―古墳時代のころ―（稲村学芸員）

- ・海路の中継地であった古墳時代のコーナーです。
- ・大塚古墳（池田町2～4丁目）から出土した鉄製武器、蓼原（たではら）古墳（神明町）の埴輪、横穴墓（おうけつぼ）出土の須恵器（すえき：トンネル式の窯を使い高温で焼かれた灰色の土器）などを展示しています。
- ・群馬県・埼玉県など内陸部の土器や埴輪が出土するだけでなく、静岡県湖西市にある湖西窯（こさいよう）でつくられた須恵器なども多量に出土しています。
- ・三浦半島では全国各地の製品が海浜部の遺跡から多く出土していることから、各地からやってくる舟の中継地となっていたことが推定されます。
- ・お墓についてみると古墳は少なく、崖に横穴を掘って遺体を埋葬する横穴墓が盛んにつくられているのが三浦半島の特徴です。

3. 人文博物館

3-2 人文館 1階展示室

- かるうと山古墳（光の丘）出土の金銅装鑿状（こんどうそうのみじょう）鉄製品は、鑿状としていますが先端に刃はありません。全国で14例しか確認されておらず、用途も不明ですが、権力を示す道具ではないかともいわれています。
- 鴨居八幡社（かもいはちまんしゃ）遺跡（鴨井3丁目）からは古墳時代の和歌山県などでみられるカツオ用と考えられている骨角製（こっかくせい）組合せ式釣針が出土しています。約1600年前から和歌山県（紀州）の漁師が黒潮に乗ってカツオを追いかけてながら三浦半島にやってきた可能性が高いようです。

⑫弾琴男子椅座像埴輪（だんきんだんしきざそうはにわ）（稲村学芸員）

- 椅子にすわり、琴を弾く高貴な身分の男子です。
- 右手には弦をはじくヘラ状の道具を持っています。
- 「日本書記」などには、神のお告げを聞くときに使われたとされています。
- 群馬県で作られ、はるか横須賀まで舟で運ばれたと考えられています。

コラム⑤

「朝鮮半島から伝えられた？古墳時代の琴」

現代人がイメージするお琴といえば、正倉院御物にもある新羅琴（起源は伽耶琴[かやぐむ]）を祖形とする13弦の箏（そう）でしょう。しかし現代には、6弦の絹糸を笏（しゃく）状の琴軋（ことさき[ぎ]）でかき鳴らす雅楽用の和琴（わごん）も伝えられています。最も似ているのが、6本の弦をスルテと呼ばれる短い竹の棒で叩いたり弾いたりする高句麗発祥のコムンゴです。蓼原古墳の弾琴男子も右手にヘラ状の道具を持っていることから、高句麗伝来のコムンゴを弾いているのかもしれません。



神明町蓼原古墳出土
弾琴男子椅座像埴輪

⑬さわってみよう：古墳時代の土器（稲村学芸員）

- 茶色の土器（土師器：はじき）と灰色の土器（須恵器：すえき）がさわれます。

⑭都と三浦半島 ー奈良～平安時代のころー（稲村学芸員）

- 奈良時代から平安時代にかけての古代のコーナーです。
- 古代人のくらしと県内最古級の寺院を紹介しています。
- 初期の東海道（古東海道）は、三浦半島から海路で上総（かずさ：千葉縣市原市周辺が上総の中心地）に渡っていたと考えられています。走水郷に津（つ：みなと）があったと思われませんが、現在の走水ではなく、当時の津に適した遠浅の海岸であった馬堀海岸付近から出航していたと考えられます。
- 中継地である公郷には県内最古級の寺院、宗元寺（そうげんじ）が、7世紀後半頃に建てられています。
- 小矢部窯址（こやべようし：小矢部2丁目）出土のロクロ土師器（はじき）は、衣笠駅の裏山で焼かれたもので、千葉県内から、古東海道を介して伝えられたと思われます。
- 他に、神明谷戸遺跡（神明町）・なたぎり遺跡（浦郷町4丁目～夏島町）などから出土した土器、土錘（どすい：土製の網のおもり）、卜骨（ぼっこつ：占いをする骨）などを展示しています。

コラム⑥

「日本にふたつしかない宗元寺の瓦」

宗元寺跡から出土した創建期（そうけんき：最初に建てられた時）瓦当（がとう：軒丸瓦[のきまるがわら]の先端）の文様は、奈良県王寺町（おうじちょう）西安寺（さいあんじ）跡から出土した瓦当と同じ范（はん：木型のこと）で作られており、全国でもこの2か所でしかみられません。マイナーな高句麗系とされる忍冬蓮華文（にんとうれんげもん）ですが、1300年以上も前に木型が奈良から直接運ばれるなど、都と密接な関係にあったことがわかります。



公郷町宗元寺跡出土瓦当

⑮三浦一族と三浦半島 一鎌倉～室町・戦国時代のころー（稲村学芸員・藤井学芸員）

- ・中世三浦一族盛衰のコーナーです。
- ・平安時代末期の11世紀頃から三浦半島を拠点として活躍した中世武士団「三浦一族」を紹介したコーナーです。
- ・沼間（逗子市）・城ヶ島（三浦市）・坂口やぐら（衣笠町）出土の骨蔵器（こつぞうき：火葬した骨を入れる壺や甕（かめ））、岩戸満願寺（まんがんじ）の瓦、普段使いの素焼きの皿である「かわらけ」などを展示しています。
- ・岩戸満願寺からは、源頼朝が鎌倉に建てた永福寺（ようふくじ）と同じ名古屋の八事裏窯（やごとうらよう）で焼かれた瓦が出土しています。県内ではこの2寺からだけの出土であり、満願寺を建てた三浦一族が頼朝と特別に深い関係であったことがわかります。
- ・大矢部磨崖仏（まがいぶつ：崖に彫られた仏像などの彫刻で、普段の仏教信仰を表します）のレプリカを展示しています。
- ・大矢部の磨崖仏は風化が進行して表面が磨滅してきているため、約40年前に製作した当館所蔵のレプリカが最も良く当時の姿をとどめています。
- ・三浦一族は、全国に活動の跡を残しましたが、ここでは鎌倉時代と戦国時代を中心に地元での姿を展示しています。
- ・戦国時代に活躍した三浦義同（よしあつ：法名は道寸（どうすん））と息子義意（よしおき）を題材にした17世紀の版本（木版印刷物）も展示しています。
- ・彼等が最後に立てこもった新井（あらい）城（三浦市三崎町小網代）の全体を示す模型を見ると、波静かな油壺の入江をかかえた半島に突き出た城であったことがわかります。

⑯衣笠城址のジオラマ（稲村学芸員）

- ・武士団の日常の生活跡は、山城の麓にありました。
- ・衣笠城の地模型をみると、大きな堀や高い石垣などはみられないことがわかります。鎌倉時代以前の城は山の自然地形を巧みに利用した山城だったのです。

⑰さわってみよう：古代・中世の瓦（稲村学芸員）

- ・奈良県出土の古代の瓦と岩戸満願寺出土の中世の瓦をさわって比べることができます。

⑱横須賀ゆかりの人物（菊地学芸員・稲村学芸員）

- ・小柴昌俊（こしば まさとし）
ニュートリノの研究を進め、2002年にノーベル物理学賞を受賞した横須賀出身の研究者です。
出身校が現在の県立横須賀高校であるのに加え、東京大学の教授就任前には横須賀市の船越地区にあった栄光学園（現・鎌倉市に移転）の教員を務めていたこともありました。

・フランソワ レオンス ヴェルニー

横須賀製鉄所の首長を務めたフランス人技師です。

横須賀製鉄所では日本人技術者の育成に最も力を入れ、付属学校も設立しました。

・小栗上野介忠順（おぐり こうすけのすけ ただまさ）

横須賀製鉄所の開設と日本の近代化に大きく貢献した江戸時代末期の幕臣です。

- ・このほか、前島密・砂村新左衛門・三木忠直・デッカー大佐・川島忠之助など横須賀にゆかりのある人物たちについて、不定期に交換しながらパネルで紹介しています。

⑩ 1階ラウンジ

- ・自動販売機を設置しています。
- ・2階受付で販売している刊行物の見本を配架しています。
- ・飲食が可能です。

3-3 人文館 2階展示室

江戸時代から現代までの三浦半島の歴史と民俗を展示しています。昔の船や漁師の家などの大きな展示物もあります。江戸時代以降、浦賀には重要な湊がおかれ、幕末にはペリーが来航、その後、横須賀製鉄所が開設しました。これら、日本史上でも有名な歴史に加えて、横須賀の都市化と暮らしの変化を物語る資料を数多く展示しています。

⑫ ようこそ近世・近代の世界へ ―海を切り拓いた人たち―（藤井学芸員）

- ・17世紀から20世紀に続く地元の人の暮らしと、今も深い関係にある「海」と「船」に関係する展示物を集めました。
- ・17世紀初頭、オランダ船リーフデ号に乗船して来日し、のちに江戸幕府の徳川家康の外交顧問を務めたウィリアム・アダムス（三浦按針）の胸像です。アダムズの日本名「三浦按針」とは、「三浦半島」（相模国三浦郡逸見村（現横須賀市逸見））に領地を与えられたことと、職業であった水先案内人＝「按針」から付けられた通称といわれています。なお、本彫刻の製作者は多摩芸術大学教授等を歴任された、彫刻家 中井延也（1934～1999）氏です。
- ・19世紀後半に横須賀に本格的な西洋式造船所を建設した時の勘定奉行 小栗上野介忠順（ただまさ）と責任者フランソワ レオンス ヴェルニーの像を並べて展示しています。
- ・「亜米利加船浦賀渡来図」は、弘化3年（1846年）、日本を開国させるために浦賀（現横須賀市浦賀）を訪れたアメリカ海軍の東インド艦隊司令官ビッドル提督の船とそれを囲む警備の船を描いています。この時、徳川幕府はアメリカによる開国要求を拒否しますが、ビッドル来航の7年後、日本はペリー艦隊の来航を受けることとなります。

㊤「人文館」の記念スタンプ

- ・「人文館」の記念スタンプを設置しています。

㊦横須賀製鉄所の記念スタンプと煉瓦の型枠（レプリカ）

- ・「ヨコスカ製鉄所」銘の記念スタンプ（歴史史料を元に再現した横須賀製鉄所製の赤煉瓦の刻印）を設置しています。
- ・横須賀製鉄所の赤煉瓦の型枠も実際に触ってご覧になれます。材質と大きさも忠実に再現したレプリカです。

㊧17～19 世紀の和洋船と浦賀（藤井学芸員）

- ・「浦賀番所模型」は、18 世紀から明治維新まで西浦賀（現横須賀市西浦賀）に置かれた船番所です。国から訪れる廻船の積荷の検査を行うなど、関所の役割を果たしました。
- ・関東地方沿岸を走っていた地元の「押送船」（おしおくりぶね）の模型も展示しています。
- ・日本でも有数の港町だった浦賀湊を出入りした諸国の弁財船（べざいせん）に備え付けていた「船筆筭」（ふなだんす）と「滑車」の実物を展示しています。
- ・「灯明堂模型」は、17 世紀に浦賀湊の入り口に建てられた和式灯台です。夜間に航海する船の安全をはかるために置かれました。当初は幕府が負担していた維持費を、慶安元年（1648 年）からは、浦賀の干鰯問屋たちが維持費を負担しました。



歌川広重画「山海見立相模・相模浦賀」

㊨浦賀の絵図（左手壁面にある大きな絵図）（藤井学芸員）

- ・18 世紀後半ごろの浦賀の絵図です。浦賀は江戸の入り口に位置することから、享保 5 年（1720 年）には武士が常駐し、江戸に出入りする船舶の検査・監視、領地の民政等を行う浦賀奉行所が設置されました。また、浦賀は干鰯（鰯を加工した肥料）を扱う商人等で栄えた港町でした。絵図にはこれら浦賀奉行所（「御役所」とあります）や浦賀の街並み、灯明堂の姿などが描かれています。
- ・当時の浦賀の町の様子がよくわかる資料で、幕府に提出されたものの控えとして町の名主（なぬし）の一本（ひともと）家に伝わったものです。

㊩さわれる展示：フランス瓦（かわら）（菊地学芸員）

- ・横浜で製造され横須賀の洋館でも多く使われていたジェラルール瓦（近代の洋瓦）をさわります。

㊦村の暮らしと三浦半島 ー江戸時代 中頃からー（瀬川学芸員）

- ・次の6つのコーナーで展示しています。

㊧地引網コーナー（瀬川学芸員）

- ・地引網船や地引網の様子を表したジオラマなどを展示紹介しています。
- ・縦半分に切られたのは地引網船で、船の構造が分かるようになっています。
- ・地引網は砂浜で地域の人々が協力し合って行うものです。
- ・三浦半島では、野比・長沢・津久井で昭和30年ごろまで盛んでした。
- ・三浦半島で捕れるイワシは、マイワシ・カタクチイワシ・ウルメイワシです。地引網では、イワシのほかコノシロなども捕れました。



地引網船

㊨鰾（しめかす）小屋コーナー（瀬川学芸員）

- ・イワシの鰾をつくる小屋などを展示紹介しています。
- ・鰾とは、地引網で捕ったイワシを、小屋の中の釜で煮て、しぼり器でしぼったカスのことです。
「17～19世紀の和洋船と浦賀」と「浦賀の絵図」のコーナーで登場した「干鰾（ほしか）」とは、イワシを天日干しただけのもので、鰾と同じく肥料として利用されました。
- ・イワシを鰾にするか干鰾にするかの選別は、イワシの大きさによって決められました。大きく脂がのったイワシは天日干しすると乾燥する前に腐ってしまうので、鰾にしたようです。
- ・鰾は畑の肥料として昭和の戦前期まで高く取引されていました。



鰾小屋

㊹古民家コーナー（瀬川学芸員）

- この家は江戸時代の終わりに現在の横須賀市佐島に建てられた漁師の家を移築したものです。「九尺三つ取り(きゅうしゃくみつどり)」と言われ、二ワ（三浦半島では土間のことを二ワと呼ぶことが多い）、ザシキ、オクがそれぞれ9尺（約2.7m）の幅を持って建てられた田の字型の住居です。佐島の漁師にとって「九尺三つ取り」の家に住むことは、一人前の証しとされていました。
- 家の中には糸や布をつくる道具もあります。その使い方などは、古民家内にて関連映像を上映・紹介しています。



江戸時代の漁師の家

㊺マイワイコーナー（瀬川学芸員）

- 漁師のハレ着である万祝（まいわい）を展示紹介しています。
- 万祝は、大漁のとき船主や網元が船子や網子に対する「ボーナス」として発注し、配ったものです。三浦半島の漁師は、正月に万祝を着て武山不動などに参拝していました。戦後になるとそのような習慣はなくなってしまいました。
- 万祝は、房総半島が発祥とされ、静岡県から青森県に分布していました。



万祝

㊻タコ漁コーナー（瀬川学芸員）

- タコツボやタコカギを展示紹介しています。
- 手前にあるずんぐりむっくりしたタコツボが古い形です。時代がくるとツボの底がシュッとほそくなっていきました。

⑫農具コーナー（瀬川学芸員）

- クワや千歯（せんば）こき、トウミなどを展示紹介しています。
- 三浦半島は田んぼが少なく、畑で麦をつくるのが主でした。
- 千歯こきやムギブチスは、脱穀（麦の粒を茎からはずす）道具です。
- トウミは、脱穀した麦（もみ殻）を実のつまったものと、実の入っていないもの・塵などとを分ける道具です。向かって右側の棒を持って回すと、中で風が起こり、その風で実の入っていないもの・塵は左側から風と共に出てきます。
- タタラは足踏みのウスで、もみ摺り（もみ殻を取り除いて実を出させる）道具です。
- アーボ・ヘーボとは、正月にその年の豊作を祈る行事、またはその作り物です。東日本に多く見られます。
- アーボはアワの穂、ヘーボはヒエの穂の意味です。
- アーボ・ヘーボでは、ヌルデ（カツノキ）やニフトコの幹をアワやヒエの穂に見立てて用いていました。
- ヌルデやニフトコは古くから横須賀に自生していたと考えられ、食用、薬用、材などに利用されていました。
- アワ・ヒエはどちらも中国原産で、縄文時代には日本で栽培されていました。
- アワとヒエは、それぞれエノコログサとイヌビエが原種といわれています。
- エノコログサもイヌビエも横須賀では普通に見られるイネ科の植物です。



アーボ・ヘーボ

コラム⑦

「西か？東か？三浦半島」

三浦半島は日本の東側に位置します。しかし、長いあいだ培ってきた人々の営みは、そう単純ではありません。ショイタは荷物を背負うときに使う道具ですが、その呼び名は中部日本を中心に西日本にも広がる呼び名です。しかし、形態に注目すると三浦半島のものには爪（板の下部にあり荷物を固定する部分）がありません。これは東日本の特徴です。つまり、呼称は西、形態は東となり、両方の特徴を持っています。おそらく、ショイタという呼び名は黒潮によって西からもたらされたのでしょう。ショイタに限らず、黒潮によって同一の文化（意味が広すぎる言葉ですが）がもたらされた地域を黒潮文化圏と呼びます。

⑬さわれる展示：和瓦（わがわら）―近世・近代―（菊地学芸員）

- ・近世の和瓦と近代の和瓦をさわって比較できます。和瓦には菊の御紋章も確認されます。

⑭横須賀製鉄所ジオラマ（菊地学芸員）

- ・明治10年代に観光客向けに配布された「横須賀港一覧絵図」を基にした模型です。
- ・高崎市に合併された旧倉渚村から寄贈されました。

⑮横須賀で建造された艦船（駆逐艦など）（菊地学芸員）

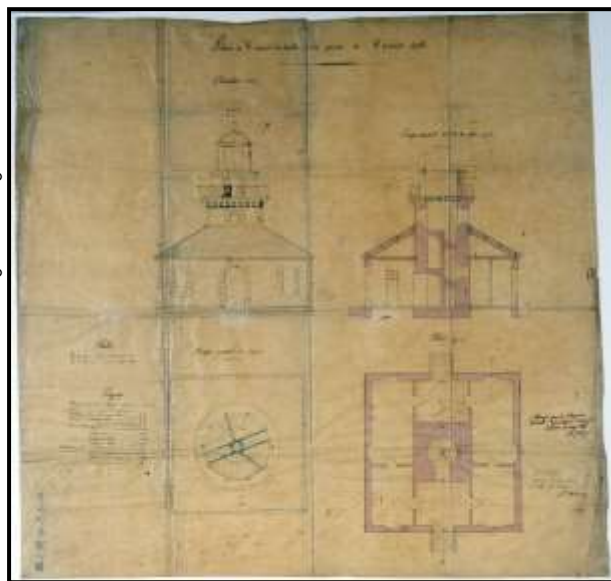
- ・横須賀海軍工廠では主に戦艦を修理・建造し、浦賀ドックでは戦艦より小型の軍艦である「駆逐艦」を多く建造していました。
- ・これらを物語る関連資料を展示しました。

⑯船と造船所図解（パネル）（藤井学芸員）

- ・軍艦の歴史と横須賀製鉄所の後身施設である横須賀造船所・横須賀海軍工廠の変遷を年表で紹介しています。

⑰横須賀製鉄所のあゆみと日本近代化への貢献（菊地学芸員）

- ・日本の近代化に大きな影響を与えた横須賀製鉄所の歴史資料を展示しています。
- ・1865年に起工した当初の計画図から設計図の原本など、貴重な資料を幅広く展示しています。
- ・設計図の原本類の多くは、市の重要文化財に指定されており、全国的にも注目される資料です。
- ・明治初期の地図類なども当時の横須賀を知る上で貴重な存在です。
- ・展示エリアの後半には、横須賀製鉄所で医師をつとめたサヴァティエの『日本植物目録』という冊子を展示しています。
- ・横須賀製鉄所では全国の材料研究を行っていましたが、サヴァティエはその折、日本各地の植物を研究し、その成果をこの本にまとめました。
- ・これは、日本の植物学史上に名を残す貴重な書籍となっています。
- ・横須賀製鉄所は造船事業にとどまらず、日本の近代化に必要な多くのものを今日の私たちにもたらしています。
- ・展示している設計図面は、横須賀製鉄所が建設した日本で最初の西洋式灯台の設計図、すなわち日本最古の西洋式灯台設計図です。
- ・フランス人技師フロランとメラングのサインが書かれています。



日本初の洋式灯台設計図
（横須賀製鉄所設計・施工）

㊼ペリー来航から始まった近代外交（藤井学芸員）

- 横須賀製鉄所ができた背景について、ペリー来航の歴史から遡って紹介しています。
- 幕末、幕府は三浦半島や房総半島に諸大名を配置し、各地に砲台場を築くなどして、江戸内海の防備を固めました。
ペリー来航以前の地元警備の様子を示す「鴨居陣屋の図」や「瓦版 相州浦賀海辺の図」、「イギリス船の図」を展示しています。
- ペリー艦隊が東京湾を調査し、島や拠点の土地にニックネームを付けた様子がわかる解説図も用意してあります。
- 嘉永6年（1853年）、久里浜沖にアメリカ大統領の命令を受けたM.C.ペリー提督の艦隊が現れました。
- 開国のきっかけになっただけでなく、日本に多くの文物をもたらしました。
- 上陸の様子を描いた従軍画家ハイネの「久里浜上陸図」「横浜上陸図」が見られます。
- 久里浜で会見の時、西洋風の椅子がなかったため、代わりにお寺で使用していた「キョクロク」というものを使用しました。
- 日本最大の淡水魚「イトウ」には、学名にペリーの名前が付けられています。
- サンマやアナゴもペリー艦隊により新種として発見され、学名が付けられた魚です。
- 日本や渡航途中で調べた動植物の情報が、「ペリー日本遠征記」にはたくさん描かれています。
- ペリー来航以前の地元警備の様子を示す「鴨居陣屋の図」や「瓦版 相州浦賀海辺の図」、「イギリス船の図」も展示しています。
- ペリー艦隊が東京湾を調査し、島や拠点の土地にニックネームを付けた様子がわかる解説図も用意してあります。



ペリー立像



ペリー久里浜上陸図（ハイネ画）

㊥近代初の外交使節と造船所計画（藤井学芸員）

- 万延元年（1860年）、幕府は日米修好通商条約の批准書を交換するために、近代日本最初の外交使節団をアメリカに派遣しました。これは、のちの横須賀製鉄所建設にもつながる重要な出来事でした。幕府派遣の外交使節団には、正使として新見豊前守正興（外国奉行兼神奈川奉行）、副使として村垣淡路守範正（箱館奉行）、目付として小栗豊後守忠順（のちに上野介・勘定奉行）らが派遣されました。
- 使節団は、アメリカ船ポータハン号に乗船し、将軍の信任状を持って太平洋を越えました。まだ未開通だった中米のパナマ地峡を蒸気機関車で越え、更に蒸気船を乗り継いで、ワシントンに到着しました。
- 世界一周して帰国した使節団の航跡を示した図面を用意し、彼等がアメリカ大統領と会った様子、各地の使節を見学した事実を示す絵を展示しています。
- 使節団正使らが乗船するポータハン号とともにサンフランシスコまで派遣された警護船「咸臨丸」の航跡も比較できる図を掲示しています。なお、咸臨丸には勝海舟や中浜万次郎（ジョン万次郎）、福澤諭吉などが乗船していました。
- 使節団の正使を務めた新見豊前守正興が太平洋上で詠んだ「和歌の短冊」、「愛用の煙草盆（たばこぼん）」、「お守りの石造狸の置物」を展示しています。
- 使節団の随行員であった幕臣森田岡太郎清行がパナマで捕えた150年前のホタルの写真を展示しています。森田岡太郎は随行中に植物などを採取し、「異域採葯」と題する冊子を作成しています。

コラム⑧

「横須賀の日本遺産—『ヨコスカ製鉄所』の赤レンガ」

横須賀市には日本遺産に登録された文化財がたくさんあります。

「ヨコスカ製鉄所」の名が刻まれた赤れんがもその一つです。

これは、江戸時代末期から明治4年（1871年）あたりにかけて横須賀で作られていたものです。この時代の赤れんがは大変に貴重なもので、この当時は、東京でも珍しかった時代でした。横須賀では他都市に先駆けてこれを製造し、赤れんがを使った建物を建設していました。

横須賀が赤れんが製造をいち早く始めた理由の一つに、横須賀製鉄所の建設がありました。横須賀製鉄所は、造船や船の修理、機械の製造などを行う総合的な工場として、江戸時代末期に起工しましたが、工場建築の耐火性の確保が課題となりました。そこで壁などに用いる材料として選ばれたのが、赤れんがでした。横須賀製鉄所では赤れんがに限らず、国産品をなるべく多く使おうとする方針がありましたが、当時の日本では、赤れんがはまだ大量生産されていませんでした。横須賀製鉄所の建設を指導したフランス人技術者は、赤れんがの国産化が可能であると判断して製造実験を行い、その量産化を成功に導きました。横須賀での赤れんが製造では、横須賀製鉄所首長ヴェルニーが勤めていたブレスト海軍の赤れんが製造法も参考にされ、寸法もほぼ同一の規格が導入されました。「ヨコスカ製鉄所」刻印れんがは工場以外にも、横須賀製鉄所が建設した日本初の西洋式の灯台である観音埼灯台、続いて建設された品川灯台（国指定重要文化財）、横須賀製鉄所副首長ティボディエ官舎などにも用いられ、幅広く活用されました。

日本遺産となった横須賀の赤れんがには、もう一つ「ヨコスカ造船所」刻印れんががあります。こちらは、横須賀製鉄所が横須賀造船所と改称された明治4年以降に製造されたものと考えられますが、現存数が極めて少なく、希少な存在となっています。発見例は、横須賀市内に加えて、横須賀製鉄所が建築を担当した富岡製糸場内で発見されたものを含めても、これまで数点しか確認されていません。これに対して、「ヨコスカ製鉄所」刻印れんがは現存数が多く、博物館に加えてヴェルニー記念館にも実物を展示しています。

今後、「ヨコスカ造船所」刻印れんがの発見につとめ、兄弟分である「ヨコスカ製鉄所」刻印れんがと合せて兄弟そろっての展示ができるよう願っています。



日本遺産「ヨコスカ造船所」刻印れんが

④トピックス展示コーナー（人文系学芸員）

- ・2～3か月ごとに展示を更新しているコーナーで、季節や時事に合わせた内容を紹介しています。

④近現代のあゆみ ―幕末からの近代化と都市化―（菊地学芸員・藤井学芸員・瀬川学芸員）

- ・幕末から現代までの歴史と街の移り変わりを広く紹介しています。
- ・まず、陸軍や海軍施設の拡張と、これに伴う都市化の様子などを市域の変遷や旧軍施設の分布図などで紹介しています。
- ・近現代における大きな出来事であった関東大震災と第2次世界大戦についても、原本資料を交えて展示・紹介しています。
- ・関東大震災の展示では、海軍技師が記した報告書の原本を展示しています。
- ・この中には、軍の検閲によって公開を禁じられた写真も含まれています。
- ・第2次世界大戦については、戦時中の暮らしを物語る防空頭巾などの資料、海洋少女隊という戦時中ならではの出来事を紹介した雑誌記事などを展示しています。
- ・終戦直後に横須賀接收を担当したアメリカ軍の部隊が刊行した報告書の原本も展示しています。
- ・旧軍用地の転用の様子を伝える資料も展示しています。
- ・旧軍で培われた技術が戦後の技術立国日本を支えたことを紹介する資料を展示しています。
- ・横須賀は、戦前から美しい景色とモダンな都市文化を併せもつ観光地としても知られ、昔の風景画や写真、観光パンフレットなども展示しています。
- ・この他、横須賀における近郊農業の様子を伝える資料、農業史の冊子も展示しており、ここからも、ハウレンソウ栽培の奨励などの旧軍の影響を知ることができます。



戦時中の横須賀海洋少女団の訓練の様子



終戦後の米海軍横須賀初上陸の様子と揚陸艦

⑫大画面映像展示（菊地学芸員・藤井学芸員）

- ・横須賀製鉄所の3D映像や古写真、ペリー来航関連映像、横須賀市域の変遷などをご覧ください。
- ・ペリー来航の絵巻物を上映する際に流れている音楽は、ペリーが久里浜に来航した時に演奏された旧アメリカ国歌の「ヘイル・コロンビア」です。
- ・ペリー来航は音楽史上でも注目されている出来事でもあります。

⑬映像資料閲覧コーナー（菊地学芸員・藤井学芸員）

- ・歴史資料や古写真、動画映像をご覧ください。
- ・古地図なども収録しているので、ゆっくりご覧いただけます。

⑭旧船台地下より出土した松丸太と石材（菊地学芸員）

- ・横須賀製鉄所の船台に使われていた松杭（まつくい）と石材です。
- ・ヴェルニー公園近くのショッピングセンターの工事で出土しました。

コラム⑨

「上町の看板建築と汐入・坂本界隈の出桁造り等の商店建築群」

現横須賀市域には戦前の商店建築が数多く残されています。また、戦前の横須賀市内では要塞地帯法によって木造以外の建築に制限があったことから、民間の建築では比較的大規模なものでも木造が主であるといった傾向も窺えます。戦前の商店がとりわけ数多く現存し、長い区間に渡って歴史的町並みを形成しているのが、上町地区と汐入から坂本町にかけての界隈です。

上町地区の県道26号線沿いには、いわゆる「看板建築」と「出桁造り」の商店建築が建ち並んでいます。これらの建築年代は昭和5・6年(1930・1931年)のものが多く、そのほとんどが関東大震災で被災を受けた後の復興建築、あるいは、区画整理による建て替えの建築であると考えられます。これらの商店建築は、建設当初の姿をよく伝える保存状態の良いものが多いのに加えて、外観のデザインに特徴的で優れたものが複数散見されます。この上町地区の商店建築のうち、特に、看板建築で特筆される建物は多いですが、とりわけ、祭礼用品を扱うM商店、画廊と喫茶店が入居する3階建てのS商店、尖塔風のアーチが外壁全体に大胆に採り入れられた旧U商店などは、各種メディア等で紹介される例も多く、地域で広く知られる存在になりつつあります。これら、上町地区の歴史的建築と町並みについては、予てより歴史的重要性が指摘され続けてきました(参考文献1)~3)等)。更に、文化庁記念物課による「採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究会」では、「上町の看板建築・出桁建築群」として、「2次調査対象地域及び重要地域」に選定の上、報告がなされるなど(文化庁記念物課監修『都市の文化と景観』同成社、2010年4月(他に同年3月刊行報告書あり))、近年では、歴史的景観としての重要性が指摘される例も増えています。

加えて、上町地区とその周辺界隈には、商店建築以外にも、東中里町内会館、日本基督教団横須賀上町教会・付属めぐみ幼稚園(国登録有形文化財)、いわゆる一間洋館の住宅などの同年代の歴史的建築が点在しています。

汐入から坂本方面にかけの横須賀市道沿いには、所謂「出桁造り」の建築が長い区間に渡って数多く建ち並び、町並みを形成しているのが特徴的です。

江戸時代から問屋が建ち並び、近代以後も繁えた浦賀地区には、先に実施された神奈川県近代和風建築調査結果(参考文献4))でも明らかなように、優れた和風建築が点在しており、歴史的町並みを今に伝えています。浦賀地区の歴史的商店建築には、蔵造りや出桁造りが多く、中には建築年が江戸期に遡ると伝えられる蔵などが存在します。一方、横須賀市北部地区では、追浜地区に看板建築が点在すると共に、船越地区にも戦前から繁華であった様子を体現する建築が点在しています。この船越地区、および、逸見地区には戦前にカフェーとして開業した事が明らかな建築も現存しています。逸見地区では、この建築以外にも戦前の看板建築や出桁造りの商店、ハーフティンバーの外観を持つ写真館などの建

築が点在している。また、逸見地区の出桁造りでは、大規模なものが複数存在します。



図1 上町の看板建築 ①



図2 上町の看板建築 ②
(手前から2棟目に3階建)



図3 坂本から汐入にかけての出桁
造りの建築群

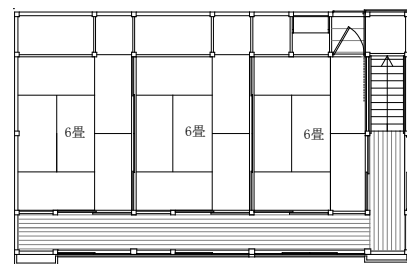
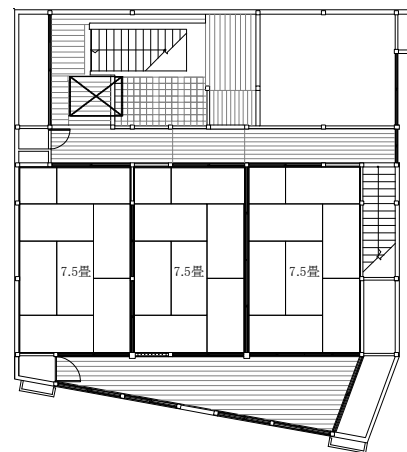
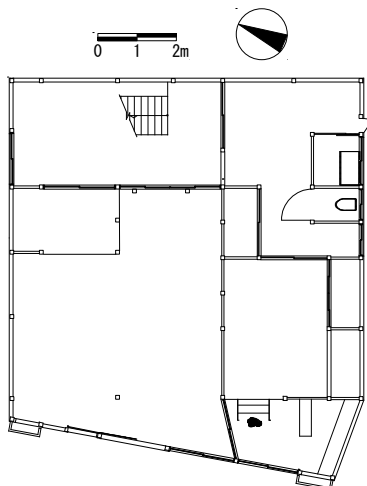


図4 3階建ての看板建築
(旧蓬菜屋(すぺーす三季))
出典：新横須賀市史p.295,
平成16年5月実測

＜参考文献＞

- 1) 『横須賀市内近代化遺産総合専門調査報告書』横須賀自然・人文博物館，2003 年
- 2) 『神奈川県近代洋風建築調査報告書』神奈川県教育庁文化財保護課，1988 年
- 3) 『新横須賀市史 別編文化遺産』横須賀市，2009 年
- 4) 『神奈川県の近代和風建築－神奈川県近代和風建築調査報告書－』
神奈川県教育委員会，2000 年

3-4 人文館 3階

◆3階ラウンジ

- 自動販売機を設置しています。
- 景色が良く、眼下には京浜急行が往来し、東京湾の奥には房総半島も見えます。
- 飲食が可能です。



3階ラウンジから見える風景

◆3階ラウンジ横 昔のおもちゃコーナー（瀬川学芸員）

- けん玉、こま、お手玉、だるま落としが置いてあり、自由に遊べます。
- また、こども向けの図書も置いてあります。

◆文化財収蔵庫（瀬川学芸員）

- 外に見える建物は「文化財収蔵庫」と言い、国指定重要有形民俗文化財である漁船、魚網、生簀籠などの「三浦半島の漁撈用具」2,603点が収蔵されています。毎年5月連休、文化の日などに一般公開しています。



文化財収蔵庫

◆トピックス展示コーナー（人文系学芸員）

- 2～3か月ごとに展示を更新しているコーナーで、季節や時事に合わせた内容を紹介しています。

◆日本遺産（菊地学芸員）

- 日本遺産に認定された横須賀の構成文化財を一堂に紹介したパネルです。
- 展示してある煉瓦も日本遺産で、横須賀製鉄所で製造された実物です。
- 人文館2階の常設展示室にも日本遺産の図面などが展示されています。

4. 学芸員紹介



がくげいいんしょうかい 学芸員紹介

建築史学



きくち 菊地
幕末以降の歴史的
建造物を調べています。

海洋生物学



はぎわら 萩原
海洋生物、鳥、けもの
などの質問にこたえます。

地球科学



しばた 柴田
地層や化石、岩石、
活断層はおまかせ！

昆虫学



うちふね 内船
益虫、害虫の区別なく
ムシなら何でも★

植物学



とどorigi 等々力
理系・文系の垣根を越えた、
生物の「対話」に興味があります。

民俗学



せがわ 瀬川
祭りや年中行事を
調べています！

文献史学



ふじい 藤井
江戸時代の古文書から村の歴史
や旗本について調べています。

考古学



いなむら 稲村
地下に眠る歴史を
掘り起こしています！

課長



たかぎ 高木
博物館を統括しています。
皆様のご要望にお応えします。

がくげいいん はくぶつかんしりよう しゅうしやう ほんかん てんじ ちようさ けんきゆう はくぶつかんほう さだ せんもんしよくいん
学芸員とは、博物館資料の収集・保管・展示・調査・研究をおこなう「博物館法」に定められた専門職員です。

5. 自然教育園・ヴェルニー記念館

◆馬堀自然教育園

馬堀自然教育園は東京湾に近接した面積約 3.8ha の緑地で、1 周約 20 分で歩ける観察路とさまざまな生物がすみ水辺が整備されています。園内では自然の保全や三浦半島で希少となった動植物の保護を行っていて、近隣の小中学校をはじめとする市民に自然体験の場として利用されています。2016 年には三浦半島の自然にふれられる場所として横須賀市の天然記念物に指定されました。

園内にはタブノキ、スダジイ、オオシマザクラなどの三浦半島を代表する樹木が茂り、水辺にはゲンジボタル、ヘイケボタル、ミナミメダカ、トウキョウサンショウウオ、アカハライモリなどが移植され定着しています。こうした自然の保全・再生の成果は、三浦半島各所の環境保全活動や環境教育活動などに生かされています。



ゲンジボタル



オオシマザクラ

◆天神島臨海自然教育園

天神島は相模湾に面した三浦半島の西海岸にあり、江ノ島、丹沢山地をはじめ、富士山、箱根や伊豆半島の山並み、伊豆大島まで一望できる景勝地です。島にはスカシユリ、ハマボウなど多くの海岸植物が育ち、海岸や周囲の海には多種多様な海洋生物が見られます。天神島に自生するハマオモト（ハマユウ）は自然分布の北限地として 1953 年に神奈川県天然記念物に指定されました。さらに 1965 年には天神島・笠島及び周辺海域（54 万㎡）が名勝の指定を受け、翌 1966 年からは臨海自然教育園として、自然環境の保全と自然観察・環境学習の場を提供することを目的に博物館が管理運営しています。



ハマオモト（ハマユウ）



シロウミウシ

◆ヴェルニー記念館

この記念館は、横須賀製鉄所（造船所）を建設し、日本近代工業化の基礎をつくりあげたフランス人、フランソワ・レオン・ヴェルニー（François Léonce Verny）の功績と、横須賀製鉄所建設の意義を、永く後世に伝えるために建てられました。



ヴェルニー記念館全景

ヴェルニーの生い立ち

ヴェルニーは、江戸時代末期に日本へ招かれた外国人技術者の一人でした。ヴェルニーは、1837 年 12 月 2 日にフランスのアルデシュ県オブナに生まれました。リヨンの国立高等中学校に学び、1856 年パリのエコール・ポリテクニク（理工科大学校）に入学しました。1858 年海軍造船大学校に進学し、造船技師の道に進みました。25 才の時、二等造船技師資格を取り、プレストの海軍工廠（こうしょう）に勤務し、海軍の技術者として中国の寧波（ニンポー）で造船に従事していました。

当時、開国直後の幕府の間で、世界に肩を並べるには、日本の海軍力・海運力整備と工業力の強化が急務であるという認識が強まり、横須賀製鉄所を建設することになりました。そして、ヴェルニーは、その建設と運営のために来日を決意しました。

製鉄所の首長（所長）として日本で活躍すること 12 年、1876 年（明治 9 年）3 月 13 日に帰国しました。1908 年 5 月 2 日、故郷オブナで死去しました。享年 71 才でした。生家は、今もそのまま残っています。

**横須賀市自然・人文博物館
博物館わくわくたんけんブック**

令和元年（2019 年） 7 月 発 行

編集・発行 横須賀市自然・人文博物館

〒 238-0016 神奈川県横須賀市深田台 95

電話 046-824-3688 Fax 046-824-3658

E-mail: m-bes@city.yokosuka.kanagawa.jp

<https://www.museum.yokosuka.kanagawa.jp>